

■冠水路の走行

水深	自動車走行
～10cm	走行可能
10～30cm	ブレーキ性能が低下
30～50cm	自動車のエンジンが停止することがある 自動車からの退出を図る
50cm～	車が浮く。パワーウィンドウが開かなくなり車の中に閉じ込められてしまう 車と共に流され非常に危険な状態となる

※出典：千葉県津波避難計画策定指針

浸水した際、水深が深くなると、歩行や自動車の走行に支障をきたし、移動が困難になります。流れが速い場合、足首まで漬かる10センチ程度の深さでも徒歩での移動は危険が伴います。

冠水路への進入は危険行為



台風QRコード  
水害タイムライン

避難のタイミングを考える目安として活用できます。

命を守るための最善の行動

避難とは「難」を「避」けることです。避難先は指定避難所だけではありません。自身が災害から身を守る所が避難所になります。

安全が確保される場所こそが避難場所

安全な場所にいる人は、そこが避難場所です。

周辺で災害が発生している場合や周囲の状況が分からない夜間など、移動を伴う避難が命に危険を及ぼすと判断する場合は、「近隣の安全な場所」への避難や、少しでも命が助かる可能性の高い避難行動として、建物内のより安全な部屋などへ移動します。

また、避難先は指定された避難所だけではありません。安全な場所に住んでいる親戚・知人の家へ避難することも選択肢の一つです。

夜間の移動は大変危険です。日中の明るい間に避難するなど、適時適切に避難するために、日頃から家族や地域で周辺にどのような危険があるのか話し合い、もし

もの時に備えておきます。

感染症などを踏まえた避難所の新たな形

新型コロナウイルス感染症などの感染症が流行している中でも、風水害や地震などの災害はやってきます。

市では、避難所の過密状態を避けるため、これまでよりも多くの避難所を確保。施設の状況に応じた感染症対策を徹底するなど、新しい避難所の運営を進めています。

避難する際は、マスクの着用と手洗いの徹底などの感染症対策が求められます。

自然災害から身を守るために

大雨の時に注意しなければならぬのが土砂災害です。大雨な

災害への備えを、今一度

新型コロナウイルス感染症により、私たちには新しい生活様式の実践が求められています。

また、台風による暴風や豪雨といった自然災害が毎年発生しており、コロナ禍における今年も、記録的な大雨が全国で大きな災害をもたらしています。

市では、防災行政無線、緊急告知ラジオ、緊急速報メール、市公式ホームページ、メール配信サービス、さらにNHKデータ放送など、さまざまなツールを活用して災害に関する情報を発信しています。

市民の皆さんは、これらの情報をはじめ、気象庁からの警報などの防災・気象情報を常に意

識してください。洪水ハザードマップや市公式ホームページなどで、住んでいる地域の状況や避難経路などの確認も大切です。緊急時の連絡体制、備蓄品や非常時の持出品などについても、家族や親戚、友人、職場、そして地域などで話し合い、確認してください。なにより、避難情報が出ていなくても危険を感じた場合は、いち早く安全な場所に住んでいる知人の家などに避難するなど、「自らの命は自らが守る」という意識を持ち行動することが大切です。

自らの、そして大切な人の命を守るための災害への備えを、今一度確認してください。

Interview



総務部総務課長 小野寺 仁

どを引き金に、崖崩れや土石流、地滑りなどによる土砂災害が発生する恐れがあります。土砂災害の警戒区域に指定されている地域の人は特に注意が必要になります。警戒区域は市公式ホームページや洪水ハザードマップ

地域の知恵を結集した災害マップ

津山町横山南沢地区は、多くの人が町外に勤めています。昼間は高齢者が多く、避難に支援を要する人たちです。また、南沢地区は、以前から大きな火災や水害などの災害を経験してきた歴史があり、防災に対する意識が強い地域です。

こうした背景が下地となり、昨年4月、地域のハザードマップを作成しました。地域住民が集まり、地域内の出水や土砂災害の危険がある箇所を確認し、想定される災害時の水の流れ、それに伴う避難経路などを図面に書き込みました。

危険箇所を洗い出し、地域全体で共有。マップを活用していざという時に備えたいですね。



Interview



津山町横山1・2区 自治会長 佐藤 章さん(69)

自らの命を最優先に考える

行政は災害に備え、地域を守るための取り組みを進めており、災害発生の際に高い場合は各種の情報発信する。

災害に備えているのは行政だけではなく、地域に目を向ければ、行政長などのリーダーを中心に危険箇所や安全な避難経路を確認し、避難に支援を要する人を自分たちで守ろうと、災害発生時の安全確認や連絡網を構築している。

災害発生時、被害の全てに行政が同時に対応することは難しい。「公助が来るまでは自助、共助で地域を守らなければ」。あるリーダーは、行政を当てにしないのではなく、まずは自分たちで何とかしなければならぬと考えている。

「日頃の備え」は行動が伴ってこそ意味がある。災害に備える取り組みは一つではなく、住んでいる地域や災害の数だけ方法がある。自宅周辺にどんな危険箇所があるのか、改めて防災という視点で見つめ直すことで、新たな気付きが生まれる。

「命を守るための行動」とは何か、災害が起きる前に自分事として考えたい。自らの命を最優先に考えられるのは自分なのだから。